

シビックプライドと共に10年 ～仲間との終わらない旅は珠玉の時間の共有～

特定非営利活動法人 今治シビックプライドセンター 代表理事 ともだ やすたか 友田 康貴

1 今治シビックプライドセンター 誕生の背景

シビックプライドという言葉に冠している団体ながら、「シビックプライドとはこういうことです!」と明確に答えることができません。シビックプライドは『都市に対する誇りや愛着』『特定の場所をよい場所にするために自分自身が何らかの形で関わっていくという、ある種の当事者意識』と定義されています。

特定非営利活動法人今治シビックプライドセンター(以下ICPC)は今治港を再生する「みなと再生プロジェクト」と共に活動を続け、より良いみなととしていくためにこれからも関わっていきます。シビックプライドと出会い10年、自分たちの言葉にできるシビックプライドの輪郭が見えてきたのは最近のことです。その言葉とは「後世にどのような港・街を残していくのかを前提として考え行動する」です。ここに至るまでの10年の活動は試行錯誤の連続でした。

シビックプライドという言葉と出会ったのは、平成19年に開催された、みなと再生委員会です。みなと再生委員会は、今治港を再生させるため、市民が新しいみなとのコンセプトやあり方を白紙の状態から話し合う委員会でした。今治市は海に開け、海から発展してきた町で、港が歴史や文化を紡ぎだしてきたという成り立ちから、港がかつてのような活気を取り戻すことは、港のみならず隣接する中心市街地の再生を図る上でも重要でした。一年の間に9回にわたり話し合われた委員会では、『「交通」の港



「みなと交流センター(愛称:はーばりー)」と筆者

から「交流」のみなとへ』というコンセプトを導きだし、市民や来訪者が憩い集う市民広場の実現と併せ、「海事都市今治」の海の玄関口に相応しいアメニティの向上を柱とした【みなと再生構想～今治シビックプライドセンターから始まる交流のみなとづくり～】の市民提言を平成20年2月に行いました。

このみなと再生委員会の終盤に、「ハード整備だけではどうにもならないのでは」という閉塞感が委員の間に漂った時期がありました。その時何か打開策はないかと委員の意見を集約して生まれた発想がICPCという組織をつくり、ソフト事業を市民主導で推進しようというものでした。当時私たちはワクワクしました。何にワクワクしたのかというと、みなと再生を役所任せにせず、市民がきちんと関わっていこうとしたこと、そして従来の手法では先が拓けない課題を解決するために、これまでない発想や手法を導入しようとしたことでした。

この市民提言の翌年に、みなと再生事業基本計画策定業務委託のプロポーザルにより、A・N・K共

同企業体¹が選定され、今治港の再生事業が動き出しました。

この事業は、港再開発のランドスケープデザインを建築主導で進めるという今治市にとっては非常に珍しいケースであったため、「みなと交流センター（愛称：はーばりー）」が竣工するまでに約8年の歳月を要しました。平成32年に仮の完成を目標として、現在もみなと再生エリア整備事業は続いています。みなと再生事業はリーマンショック等社会情勢の変化による市の方針転換や経済界からの提言等により、大幅な変更を迫られる局面がありましたが、一貫して揺るがない「事業の軸」が存在しました。

一つは市民提言における、市民活動組織 I C P C の継続であり、もう一つは A・N・K 共同企業体のプロポーザル提案における「海のコンコース」の整備でした。



みなと再生事業透視図

海のコンコースは、みなと再生事業エリアを南北に縦貫する形状から、コンコースに付帯する施設・緑地の関連性を保ち、多様なイベントの同時開催が可能です。コンコースでの賑わいが中心市街地に波及することも期待され、船や海のイベントを開催することで、来訪者や市民が交流し、「海とまちをつなぐ」親水空間を目指しました。

この実現のため市民・行政・企業が協働し、持続的にまちづくりに取り組める仕組みが不可欠であり、港はもちろんのこと、中心市街地や島嶼部も含め新

しくなる今治港を起点としたまちづくりや賑わいづくりを推進する I C P C に期待が寄せられました。

プロポーザル公開審査会において I C P C のメンバーがコンコースの位置付けを知った時、「そんなものを造ってどうするのか?」「誰が利用するのか?」というのが率直な感想でした。しかし施設整備前から、港を含めた中心市街地エリアで様々なイベント等の企画運営を継続してきた結果、当初の疑問は、「コンコースという市民広場が完成することにより、どのような風景がみなとに新たに生まれるか、また創っていかないといけないのか」という、期待に満ちた想いによって変わっていきました。

この変化こそがシビックプライドの醸成であると考えます。私たちの起点は今治港です。新しくなるみなとをどのような舞台にすれば賑わいが生まれるのか常に考えてきました。コンコースにおいては「日常は市民利用が当たり前の風景として溶け込み、イベント時にはとっておきの“ハレ”の場になる所」と決めました。

私たちの活動はコンコースだけにとどまらず、公園・海・島嶼部にも出かけイベントを開催することで、その過程で生まれる課題を整理し、賑わいのイメージを具体化してきました。“公共空間”を使うことに不慣れであった私たちは、施設整備以前から活動することで、「多様な使用を促すこと」を目的として社会実験を行ってきました。I C P C のこれまでの活動は賑わいづくりのトライ&エラーの連続です。その中で課題収集・課題解決能力が向上し、ノウハウを蓄積してきました。

2 「新しいみなと賑わい創出計画」

I C P C の活動を進めていく中では、みなと再生委員会で議論した方向性をソフト、ハードの両面から変更しなくてはならない時がありました。

I C P C は平成21年に行政主導の協議会として設立されました。事前承認制や公平性という部分で市では行いにくいことを、市に代わって、市と協働

して行っていく組織を目指しました。新しい発想や従来の手法にとらわれない方法を取り入れようとした結果「地に足がついていない」という議論も内部から生まれました。今振り返ると至極当然なのですが、みなと再生事業の推進のため行政主導で作った組織に、新しい発想の理解の輪を広げていこうという覚悟がないのは当たり前で、メンバー間の議論はなかなか深まっていきませんでした。

また、A・N・K共同企業体のプロポーザル提案には七年都市「海の市民の拠点づくり」というICPCとの連携プロジェクトも盛り込まれていました。平成21年から平成27年の完成までに行うコト（仕組み・仕掛け）や目標として、「プレゼンテーションシッ：世界の海事関係者へみなと再生プロジェクトを広報する手法」、「パブリックコンストラク：市民を巻き込んだ建築の手法」などが提案されており、これらはICPCの活動の指針となり得るものでした。しかし、経済状況の悪化による事業規模縮小などにより、七年都市の考えは宙に浮いてしまい、またメンバー間の議論が深まらないことによるメンバーの脱退もあり、ICPCは進むべき方向を見失いつつありました。

みなと再生事業が停滞している時期に、原広司+アトリエ・ファイ建築研究所の原広司氏から「遠くに石を投げる」という言葉を教えていただきました。目の前の事象に一喜一憂するのではなく、他者に左右されない自分たちの指針、新しいみなとに賑わいを創造するにはどうすればいいか、自分たちの計画を創ることを考え始めました。そしてこの指止まれの手法による仲間集めから、参加してくれた皆さんと一緒に成長できる方法「一人の百歩より、百人の一步」への転換を模索しました。

行政主導でなく市民主体のみなと再生を目指し、studio-Lのコミュニティデザイナー山崎亮さんに、計画づくりの協力を依頼しました。山崎さんは、有馬富士公園（兵庫県）におけるキャスト²役の地元NPOがさまざまなプログラムを展開することで賑

わいをもたらす仕掛けや、マルヤガーデンズ（鹿児島県）という各フロアに「ガーデン」と呼ばれるオープンスペースを持つ商業施設におけるコミュニティづくりの支援など、全国各地で賑わいづくりのプロジェクトに取り組みられています。このコミュニティ活動をデザインし形にしていく手法を取り入れ、交流のみなと実現のため、平成23年に1年をかけ【新しいみなと賑わい創出計画】を創りました。

「パブリックのために市民に何ができるのか。住む人たちが立ち上がって、自分たちの私益だけでなく公益のために行動を起こさないと、豊かな風景はできあがらない」という山崎さんの考えは当時の私たちの心にすっと入ってきました。

『「交通」の港から「交流」のみなとへ』のコンセプトを基本に、楽しい場所を実現するため、地域の方々に集まっていただき、9回にわたる「新しいみなとの使いこなし」を考えるワークショップを実施しました。港のフィールドワークや周辺団体のヒアリングなども実施し、新しいみなとの活用を考える上で、まず今治の魅力と課題を整理し、将来像を共有、その上で賑わいを創るために必要なコンテンツを考えました。出てきたコンテンツを「交流」、「遊び」、「学び」、「食・売」の4つの視点に絞り込み、活動の具体化を図り、「実現性」「協力者」という指標のもと整理しました。話し合いの中で重きを置いたことは、実現性です。荒唐無稽な案を考えるのではなく、実現可能人数を1人・10人・100人・1,000人と分けて整理することで、まず自分たちができることを考えました。また実現不可能なものでも、どのような協力者がいれば実現可能なのかも考えました。それらを取りまとめたのが「24の賑わい創出コンテンツ」です。この24のコンテンツを含めたものを【新しいみなと賑わい創出計画】としてとりまとめ、賛同してくれる仲間を増やすツールとして利用してきました。この提案書を創ることで私たちは新しいみなとの賑わいづくりのイメージを市民主体で定めることができました。



新しいみなと賑わい創出計画

新しくなるみなとは、人と人・人とコト（仕組み・仕掛け）が繋がる場所と考えました。繋がりが成長することにより、「地域にとってなくてはならない場所」となっていく。そして新しいみなとで活動することにより、「私」の成長（喜び）が得られ、その喜びが「あなた・他者」に伝わることで社会は成熟していきます。

新しい指針が必要となった局面で、コミュニティデザインという新しい発想を取り入れ、より具体的な提案を創る過程は私たちにとって尊い時間となりました。6年たった今でもこの【新しいみなと賑わい創出計画】を行動の指針として活用しています。計画の進捗状況を、たまにですがメンバーと共有しています。いつでも立ち戻れるお仕着せでない自分たちの指針があることにより、新しいみなとをより良い場所にしていく覚悟が、いつのまにかICPCメンバー間に芽生えていきました。

3 シビックプライドの芽

平成28年7月に中核施設、みなと交流センター（愛称：はーばりー）がオープンしました。現在も工事は継続中ですが、ICPCの役割として、市民の方々に「みなと再生プロジェクトを知ってもらう」という大きな目標がありました。解体前の港湾ビルの一画に「みなと再生プロジェクト情報センター」を構え、知ってもらうスペースを運営しました。



みなと再生プロジェクト情報センター

また、みなと交流センターの愛称募集事業を行政と協働して行い、「はーばりー」という愛称を決定しました。愛称発表会では市民を対象とした内覧会、そして共用前の駐車場にてマルシェも開催しました。これまで、行政と市民の間に立ち、いかにして新しくなるみなとに興味・期待感を持ってもらうか考え、行政が得意な情報の発信・共有を市民目線で行ってきました。現在も工事が進んでいる中、みなと周辺の風景は明らかに変わってきています。ベンチに座る人、歩いている人、自転車で訪れる人が増え、整備前から活動を続けてきた私たちにとっては嬉しい変化です。市民や来訪者が、より豊かさを感じられる空間へどのように変えていったらいいのか、誰と繋がり、誰と連携したら、より良い空間に変わっていくか、知ってもらうフェーズから仲間獲得のフェーズへと移行していっています。

新しいみなと、そして港とつながる商店街には、郷愁や郷土愛など、港に対する想いという種を持っている人はたくさんいます。その種を新しいみなとに蒔き、芽を育て、根を張り、色とりどりの花や木を咲かせることが賑わいづくりだと考えました。花や木が育ちやすい環境づくりがICPCの役割で、そこに育つ花や木であるソフト事業が幾重にも重なることが、市民そして来訪者が憩い集う心地よい公共空間の実現です。現在はいくつかの芽が新しいみなとそしてその周辺に育ち始めています。

みなと再生事業が始まる以前から、港にある広場でスケートボードの練習をしているグループがありました。彼らとの出会いは7年前に遡り、きっかけは「港でスケートボードの大会を開きたいがどうすればいいか」というものでした。現在は任意の団体ながら「今治スケートボード協会」を立ち上げ、協会の代表を務める廣川君は、ICPCの副代表を務めています。彼らは港にある公園を主たる練習場所としていました。しかし公園という公共空間とスケートボードというマッチングはなかなか行政の理解を得られるものではありませんでした。港での大会から廣川君はICPCに入会し、様々なイベントでスケートボード教室という形で仲間とともに活動を進めてきました。彼らには、港にある公園で仲間とともに練習をしてきたという、港への愛着という種があります。その種をみなとに蒔き花を咲かせることを彼ら自身が考え始めた時、オフィシャルな団体へ移行し公にコミットしていくことに動きだしました。彼らに寄り添い、「新しくなるみなとに関わっていきたい」という彼らの想いをどのように形にしていけるか、月に2回開催している定例会で一つの議題として話し合っています。

また「ミナトいまばり音楽横丁」という地元ミュージシャンが集う音楽イベントが、みなと交流センターのオープン後に始まりました。みなと、商店街の複数の会場で開催されるこのイベントは月に1回開催され、毎回20組前後の今治を中心としたミュージシャンが集まり、その輪は広がっています。みなとを含めた商店街に音楽で賑わいを創ろうという活動は、1年が経ちましたが継続して行われています。このイベントを主催している方にもみなとを含む中心市街地への想いが色濃くあります。

スケートボードや地元ミュージシャンの想いをどのようにしてみなとに定着させ、そして成長させていくのか、個の喜び、公の喜びを整理し話し合いを重ねています。

また、【新しいみなと賑わい創出計画】に盛り込

んでいる24のコンテンツの中で2つの事業に新たな展開が始まりました。「自転車観光客の立ち寄りスポット 自転車カフェ」と「漁師の波止場フィッシャーメンズワーク 来島の魚と人を結ぶ拠点の設置」です。24のコンテンツは今治市、そしてみなとの持つ背景と連動しており、新しいみなとの賑わい創出には欠かせないものでした。

今治市はしまなみ海道をサイクリストの聖地として打ち出しており、年々サイクリング観光客が増えています。サイクリングを目的とした外国人観光客も増加しており、みなと交流センターに当初から計画されていたレンタサイクル施設も、オープン後は多くの方が利用しています。また、日本三大急潮の1つである来島海峡を有し、急潮にもまれた鯛は逸品として知られており、今治港に隣接する今治漁業協同組合と連携した魚を主体とした賑わい創りも重要な要素として考えていました。

施設整備前からのイベント開催において、協力者獲得を目指し、サイクルカフェ・底引き網漁体験・海鮮バーベキュー等行いましたが、なかなか具体的な進展がない中、平成28年に商店街に2つのお店がオープンしました。自転車をモチーフとしたインテリアの「ナカムラコーヒー」、そして、地元でとれる新鮮な魚介類を使ったランチが食べられる「Café warm 魚夢」です。ほぼ同時期に開店した2つのお店の店主は商店街の息子さん、娘さんです。みなとに繋がる商店街で育った方々が24のコンテンツと連動したお店を開店することは嬉しい出来事であり、連携して活動しています。

みなとに賑わいを創るという事業は終わりのない事業だと実感しています。みなとを心地いい空間にしていくことは、活動する楽しさや関わっている感に裏打ちされた喜びだと分かり始めました。

4 これから

新しいみなとは、市内・市外の人が自然に集まり、そこに行けば楽しいことが起きているザワザワとし

た賑わいのある場所を目指しています。こうしたイメージで参考となるのが、欧州の都市に見られる広場です。ICPCではみなとを多様性の確保された広場ととらえ、平成28年度から「はーばりーマーケット」を開催しています。海のコンコースをメイン会場として、毎月の開催を目標としています。みなと交流センターには多目的ホールやキッチンスタジオ等の施設があることから、マーケットというプラットフォームをつくることで、同時開催を行っていただける行政・民間・大学等に幅広く声掛けしています。展示会、講演会、各種イベント等を単独で開催するよりもマーケットと同時開催することで、集客や満足度の向上につながることをアピールしています。毎回同時開催しているスケートボード教室やミナトいまばり音楽横丁のようなソフトを増やすことで人が自然に集まってくるマーケットの広がりイメージしています。まだまだ始めたばかりでトライ＆エラーの段階ですが、継続していくことで仲間は増えていくと信じています。

そしてはーばりーマーケットのもう一つの大きな目的として、「子どもたちに体験を通じ、みなとでの楽しい思い出を創る」ということを考えています。私たちの世代は港が交通の拠点であった頃を知っており、港には出発、別れ、出会い等人生の節目に寄り添った思い出があります。みなと再生には終わりが無いということを考えると、次世代の子どもたちにみなとでの思い出を創り残しておく必要があります。「交通」の思い出から「交流」の思い出を創るには、公共空間での楽しさと体験というキーワードが次世代のシビックプライドに繋がると考えています。

昨年「親子で家をつくってみよう」というワークショップを開催しました。6か月間に4回のワークショップを募集したところ20組の定員に40組以上の応募がありました。木材について勉強し、製材を見学、墨出しを行い、切り出し、そして建前までの一連の行程を体験しました。実際木材を使っ

た体験は子どもたちにはドキドキの連続で、墨出しや切り出しを行う際には尻込みする子もいました。組み立てはみなとにある公園で行い、建前後餅まきも行いました。建前までのワークショップでしたが、参加した子どもたちからは満足の声があがっていました。体験している子どもたちの目の輝きを見ると、思い出を残していくには、こちらも知恵をしばり真剣に舞台を作ることの重要性を改めて感じました。子どもたちの心の中にこの体験がどのように残っていくのかは私たちにはわかりません。しかしこのような体験を繰り返すことが、次世代の思い出そして担い手作りに繋がっていくことだと信じています。



ワークショップの様子

最近考えることは、10,000人訪れるイベントを年に1回開催するより、はーばりーマーケットを毎月開催しリピーターを増やすことの必要性です。体験を通じた色濃い思い出を子どもたちに残すためには、同じことを実直に飽きずに続ける必要があると感じています。

新しいみなとには水族館やショッピングセンターはありません。しかし公共空間があり目の前には素晴らしい海の景色が広がります。天気の良い日に海辺で過ごす心地よさは誰もが感じるのだと思います。また楽しそうに活動している人がいる空間は心をウキウキさせます。心地よさ、ウキウキのグレードを上げることができれば、市内・市外の人が自然に集まり、常に楽しいことが起こっている賑わいの

ある場所に成長していきます。
みなとを心地いい空間にしていくことを、ああで

もないこうでもないと言っている時間はホント
に珠玉の時間です。

脚注

- 1 原広司+アトリエ・ファイ建築研究所・西沢大良建築設計事務所・金箱構造設計事務所による共同企業体
- 2 プランニング（計画）やマネジメント（運営）に参加する人たち（市民）

寄稿者 PROFILE

友田 康貴（ともだ やすたか）

特定非営利活動法人今治シビックプライドセンター 代表理事

経 歴：1989年 株式会社トモダ入社
1995年 株式会社トモダ代表取締役就任
2008年 今治シビックプライドセンター運営会議 参画
2010年 今治シビックプライドセンター協議会 代表就任
2012年 今治市商店街協同組合副理事長就任
2012年 今治市中心市街地再生協議会 理事就任
2015年 特定非営利活動法人今治シビックプライドセンター 代表理事就任